

寶石類書

五十二

和書門			
二五	一〇	七	類
一八	三	函	架
四	五	冊	架

內閣文庫		
五	二	和
四	〇	書
七	五	類
架	冊	架

內閣文庫	
番號	和 25107
冊數	45 (23)
函號	209 99

本館
生田



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



寶石類書卷第五十二

通稱

目錄

載上通達

玉

三
種
並
花

三月三日
關

德

萬
福
合

田
松
堂

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

明治十一年 購求

寶石類書卷第五十二

遊興



殿上道遠

子日

硯蓋盛花

三月三日鬪鷄

藤花宴

菖蒲根合

田植御覽



内宴

花宴始

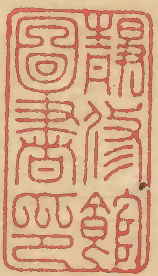
勸學院曲水

鷄合

菖蒲宴

寫菖蒲根と郭公の梅枝

扇紙合



扇引

草合

前栽合

菊合

菊綿

文臺

新雪見参

競渡

覽打耗

觀魚

芳宜華譙

糸引

掩韻

物語合

繪合

枕合

大井川三船

小弓

小鳥合

圍碁

鬪州之興

女郎花合

重陽宴並茱萸

菊の

殘菊

殘菊宴

雪山残

藏釣戲

開襟

蓮葉宴

鴿鴿戲

詩合

歌合

雙紙合

今様合

種合

襪合

小弓合

角合

脱靴

御庚申

碁手紙集擲

和歌

將碁馬王

目増勝負

筒塞

百一

いし形とり

まじ

貝木何心

小弓御遊

雜戯

將碁

大將碁

四一半錢

庚申筒塞

擲攤

らんこ

庵んいさ

かき物語

寶石比々奈遊五十二

小車遊

糸引

布引

えいふかき

十種香

銀鶴入薰物

薰物綱風流筥

白銀籠ニ虫ヲ入奉

捧物袈裟付銀枝

御本附打枝並御贈物

御手本附梅作枝

手本一卷令喰鶴口

道遙とて殿上人ととあそひて嵯峨野なとへむくひく
虫伐藝とてくひくも心是也 堀川院の時時より
くまふおちを松じり給ひなとは誰人にも裏り
も心又加茂の社司をふ侍らふくもめされるとなふ
續故事談 三 殿上の道遙とて代の始とに必ある事也
鳥羽院より後絶よきり 後冷泉院時經成中納言
苑人頭とて有る殿上人成具して六条社院大膳職
小松くくより守ふとて先系てそれより大井小寺より苑
守ふり

寶子殿書卷第百二十二

并四外上茶新中納言直 神

内宴

延喜二年正月廿日御記左大臣令管根朝臣奏先
朝雖御僂寢至有内宴多用仁壽殿此度内宴可仁
壽殿行 云 藏人式清凉殿記等廿日廿一二三日
之間若有子日使用之廿二日藏人及取司裝束仁
壽殿

新儀式正月廿日内宴事前一日藏人所雜色已下
並取司裝束仁壽殿木工寮立舞臺東庭遣使藏人
前於親王弟不仰明日可參之狀藏人頭奉仰令廻
仰可參文人等當日御仁壽殿 下畧

百練抄保元三年正月廿二日被行内宴長元七年
己後歷廿二年今被興行一昨日依雨延引関白並
太政大臣己下爲文人題

公事根元宴作正月廿一日内宴と申、内々の節會也

仁步殿より仍り文人と題、或は詩賦作りて是

之御前少く誨せ給ふ、廿一日廿二日廿三日の禮子の日

にあつ、其日松らふ道て下畧

河海鈔賢木内宴者唐太宗之舊風也、嵯峨天皇弘

仁三年幸神泉苑覽花樹命文人賦詩是始也

子日

文德實録天安元年正月し丑上畧禁中有曲宴預

之者不過公卿近侍數十人昔者上月之中必有此

事時謂之子日態也今日之宴修舊迹也

扶桑畧記寛平八年丙辰閏正月六日有子日宴行

幸北野雲林院云殿上六位己上皆著麴塵衣

袂院子日

まゝ

一りの松乃らとせも、今しふ、い、まの宮そ、松、意、以、局、り、

宗直云右齋院子日見拾遺集

百練抄寛和元年二月十三日 花山院 太上皇幸雲林院

邊子日野遊左右大臣己下陪從京洛野邊見物車

如雲

新古今和歌集 下 雜 皇融院位より給ひて後姉子に

ふ子日し給ひけるこまよりてありぬ小なりける

一条左大臣

御幸せ侍りや

御進

圓融院御歌

引くくの(此等)きい(一)が(一)び(一)を(一)ふ(一)ま(一)あ(一)り(一)き

花宴始

日本逸史弘仁三年二月辛丑幸神泉苑覽花樹命

文人賦詩賜綿花宴之節始於此矣

硯蓋盛花

新古今和歌集 春 ひしを忍ひく大内の花見ふ居て

こころよ庭小ちりてこころ花散硯のうきよ入

撰改此許こ巻しこころ

大上天皇

きつはに庭とさうりと福の花ちららぬあやしく書きたるよ
うへー

撰政大政大臣

清はせりぬ人のそあとも殊里久あはるをさ記の花のそく云

勸學院曲水

本朝世記仁平元年三月三日甲戌天晴今日於勸
學院行曲水宴北堂儒士以下多以會合依左大臣
仰也

親長記文明七年三月三日上畧御牛飼等鷄六羽

持参有闘鷄三番此事一昨日御牛飼以民部伺申

折節予候御前可被如何哉之由有御尋亂後末無

闘鷄於宮御方御前内々可有乞之由申之尤有仰

勅答仍宮御方御前有之云云本朝世記御方御前

百練抄永兼六年三月廿四日禁裏有鷄合米造之
以造本様勝為勝掛其義四日今日對其狀十

台記久壽二年四月廿四日上畧今日隆長具鷄十

羽參宇治令鬪之三月廿四日

玉海兼安三年五月二日癸巳此日院中有鷄合事

公卿殿上人已下北面上下僧入道等左右舍人其

數繁多云云左打錦幄右作黑木假屋云云各其風

流盡羨右稱依有禁制不用金銀錦等之類云云然

而甚優羨也摸臨時祭舞人抹頭花等云云尤率制

法盡金銀云云凡此經營其費不可勝計云云左頭

大納言重盛右頭中納言邦綱卿云云左右舍人之

外餘人所不見云云子細尋參仕之人可記置之奇

希也

同三日甲午今日北面鷄合内々事也

明月記建仁二年三月三日巳剋參院之間鷄合於

西中門新宮也方公卿已下濟々不入其人數依骨早出

參義明門院

室町殿年中行事三月三日上畧公家衆御目見如

例畢而入御又常御所西向云云有鳥合三番從

簾中上覽御供衆申次番頭從屏重門參入庭上

伺公御鳥八番頭獻之午飼云云持參云云掛合之事

過云云入御退出

二水記永正二年三月三日節日自他珍重々々早
且於東庭前鷄合永正二年三月三日節日自他珍重々々早
藤花宴藤花宴
本朝世記仁平元年四月廿四日し丑雨降於勸學
院有藤花宴北堂儒士多以會合云云
百練抄美安四月十九日於勸學院有藤花宴
題云藤為佳會媒云云
菖蒲宴菖蒲宴

新勅撰和歌集夏寛長元年廿御入内屏風五月詔
以菖蒲宴菖蒲宴

深き江小き河のあめ糸子の流るる多し深き江小き河のあめ糸子の流るる多し

菖蒲根合菖蒲根合

百練抄永長六年三月廿四日禁裏有鷄合中畧五
月五日禁裏有根合蓋鷄合後宴也有歌合並絃管
興

著聞集草永長六年五月五日内裏小菖蒲の根合

ありけり去三月晦日堪能の上達部ひりゆ
に殿上人等成先して弓此膳負ありけり又鶴合を
ありけり此の膳負ありけりて高蒲の根と合せて膳
負成せしれふ御装束永業四年十月秋合の
儀此や中宮后宮ふかさりて此内大臣頼宗民
部卿長家按察大納言信家小野宮中納言兼頼
左衛門督隆國侍従中納言信長二条中納言俊家
中宮大夫経輔左宰相中將能長三位中納言俊房三
位少将忠家なりけり此ひり左右の方人夕アに及
てありけり先御殿ふありて供とて後左右の文巻と

多門高き四人がりけり南のひりこの座北東の間小東面
のほはくは多門洲演成はけりて志ろこの書なりけり
多り又同じき鶴ヶ先成はけりけり沉香成はく岩石と化
して立し書此の間は浪のなり水成流して書前小札を
多り此のうへに書一卷とて象眼とて紙して文紙形
と横して成のく和紙小首成はくありけりこのく表紙を
して秋文青きとてり也虎魁を袖とて志路ひひと
はすし由に打しれあり青は色の為きのとて浪乃
文のありぬ長根小筋成はくして書の上より洲演の
色ありけりけりこの洲のうへふもとてり中畧又葉

玉のふ流よりして書の上よりかく言の人く至れえんの
うへに作次小判よりしてのまゝゆと多つ花人は是れく或く
文臺の末より石多し小書成りて高蒲と化りて
望より押し次又花人右方の文臺成りて言二
人よりりゆりせのうへに右轂の臺よりして右轂を
多つせの希に蝶舞の童六人とはりて右根のうへに
よのく和歌よりして根よりして化より又葉玉なりて
根成りてよりしてまゝゆのゆんこかく葉玉より金銀より
化より言の人西のまはる作次小判判のまゝゆを
多つ花人一人是れくして文臺の西の言にまゝゆを

竹臺のてい成りて竹よりしてまゝゆの相よりして
作よりしてまゝゆよりして左よりして右の言に公に引
御前の簀成りて東小わりて左に侍りて内大臣師
方の弟頼以信長経補以俊房以左頭并経家朝臣右頭
中將資総朝臣すして文臺の下に作れよの言に左右
のまゝゆよりして一人せの所より作れ件の童二人
隆國以の子息よりみま殿より作より頭并経家朝
臣良基朝臣と多し頭中將資総朝臣基家朝臣成り
左右お分て御前に作れ経家朝臣なり根成りて良
基朝臣よりして南のひより小のひよりして右又かこれより

其ありうゝ儀年ぬ左の根一丈貳尺右の根一丈二尺うゝ
右のりふりきりー右の音すゝゆりうゝるりふりきり
結之定めりれり二番とかきりうゝてきりぬぬ次
和歌六首儀うゝ左講師長方和歌講師經家和歌右乃
講師隆俊和歌講師資經和歌判者内大臣右大臣藤原高
藤原公早苗志祝之とめりうゝて終りてきりきりうゝて
度ふり儀は次小管経の御調度儀和歌和歌民部卿
等二位中納言昆邕経信朝長笠定家和歌和歌筆管隆俊
唱歌資仲和歌和歌子調子の後内大臣御氣多きりうゝて
して御笛儀とて御座の下にすゝて是儀を儀とて御

笛儀とてせりしきりて後柏子を仕せりうゝて
長に似らり大長竹とて終りて度小の和歌を安名
張とて律曲のとり小諸小御衣儀を儀とての儀退
出今度殿上人の法くありきりうゝて
古事談都芳門院根合之時右方有五尺之根云云
件根備前國牟計の杖戸小あり似菖蒲物の根云云
云云凡菖蒲根長不遇尺也前例最長根ハ杜若根也
云云

あやめの根と郭云と似り梅枝に付

新古今和歌集^上

雜

三系院御時六月五日巧めは祢

成時多のこゝ女化りて梅のさゝこすつゝ人のまゝりて侍

りくを是成題してつゝまゝとくはらまきけ

梅のさゝこすつゝ人のまゝりて侍

御車前右府小直衣云云以下公卿殿上人數輩祝

後深心院関白記應安六年五月廿八日己巳陰及

晚小雨新院昨日蜜々幸北山御覽田殖云云被云

御車前右府小直衣云云以下公卿殿上人數輩祝

候云昨今如此云云

長秋記保延元年五月十七日己丑晴廿院近習女

房殿上人左右各十餘人調扇紙可合之由日來云

今日有其事左方坊門殿故関白小因幡羨乃光

大宮少將少甫男公能朝臣中畧臨期上皇御幸

右方女房著紙裝束自儿下帷震殿於南庇有此事

岳母屋御簾右方二階上置筥十一各所進也敷龍

鬢其上立二階敷唐錦茵以扇為様左方無其役只

進紙不出合筥或以銀作是或卷付或只裏紙云云

此後兩院渡御仁和寺田中殿

親長記文明十七年三月十五日晴今日於内裏有

扇合元長朝臣御人數也

扇引

台記久安六年八月四日上暮午剋參内朝有扇引

之興是夜於宿候

關州之興

台記久安六年八月六日己酉午剋參朝餉即渡御

皇后宮御方忽有關州之興了還御

草合

拾遺和歌集下雜草合一傳きふ下小

惠慶何う

後拾遺和歌集教釋人の草合せりる二朝の草

合せりるにかみ草かられハ

み人

由多ふのころけり物成りて葉は色みそりるに邪

女郎花合

岷江入楚紅葉賀

朱雀院の行幸ハ神皇月の十日

あまりあり下畧 三糸朱雀に四町に造らんとす是

後院也天子脱履の後の御在所也 延喜御宇に 朱雀

院とす 宇多の命に古今に 朱雀院の女郎花合

とあり也 宇多御門の御幸之位成りて後院に

法座あり也 秘 朱雀院の事まへに記せり 河康保二

年十月をひきり時分是をいふはくは

前栽合

梅以草花稱之歟可考

禁秘御鈔前栽

清涼殿東庭並同西庭朝餉並臺盤所前

藤壺也

延喜元年左右

衛門栽艸架延喜栽菊於東庭並仁壽殿東庭

同上畧 或又隨勅命便宜進艸木之人植之前栽者

昔滝口美之植萩戸萩艸無沙汰有根樹忌方角但

上古無其沙汰如何菊合前栽合時植之下畧

小右記長和二年八月十三日今日左衛門督教通

相催人々向嵯峨野堀前栽可覺参皇后大后宮云

云 秘傳御鈔前栽

百練抄嘉保二年八月廿八日於鳥羽有前裁合事

増鏡老波建治三年卯月三日後元西園寺の殿系凡

とと曰こと小内りり終ふ御臺よりとせ給ひと前裁合事

りりとをわりりり終ふ御臺よりとせ給ひと前裁合事

朝臣の椿乃鴻の守りしきを作りてとてりりりり平大綱

言いまこと下痛うと兵場佐助とひりりりりりりりりり

川の橋代めすてりりりりりりりりりりりりりりりりり

守りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

著聞集木草康保三年同八月十五日作物所畫所あり

りりりり殿西の小倉小前裁代りりりりりりりりりりりり

朝臣治部卿源朝臣朝成朝臣中後殿小内侍長小内侍源

殿のひりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

小多きふ表よ入と侍長唱歌と管絃と奏代又高光永頼小

花の枝小内りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

公は侍長小内りりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

侍長和歌とを御保光朝臣ととととととととととととととと

又管絃の具ありてと後公は小祿を給りせまじ

同嘉保二年八月廿八日上皇鳥羽殿にりりりりりりりりり

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

御隨身小玉進左大臣（？）中納言基忠（？）を
左方の頭とん（？）のく宰相中納言通心（？）を左方の頭とん（？）
外公（？）二人敷（？）と十余人お（？）れり南てんの後此（？）ならよ
すこの南面の女院の御方なり（？）う妙々の具あり（？）大臣中官
関白（？）左大臣（？）あひ（？）りて左方小作（？）より（？）大臣中官
大夫民部（？）右方に（？）りし（？）女（？）の作（？）によりて（？）南座（？）より（？）
被り（？）か也方人左衛門（？）治部（？）中納言（？）基忠（？）中納言（？）房（？）右
左衛門（？）治部（？）中納言（？）宰相中納言（？）通心（？）直衣（？）大臣（？）馬帽
子直衣（？）より右方の人（？）より（？）て（？）燈臺（？）と（？）り（？）の作（？）
より（？）て（？）風流（？）並（？）ふ（？）の具（？）ハ（？）と（？）ら（？）る（？）御而（？）燈臺（？）

義藤（？）に（？）根（？）の（？）を（？）ま（？）り（？）き（？）せん（？）さい（？）み（？）り（？）櫛（？）或（？）者
不名二人（？）死（？）く（？）階（？）の（？）西（？）に（？）未（？）進（？）を（？）と（？）く（？）透（？）長（？）櫛（？）に（？）丹（？）青（？）と
は（？）り（？）て（？）は（？）り（？）る（？）れ（？）と（？）て（？）ら（？）る（？）より（？）き（？）せん（？）敷（？）上人（？）方人
以下（？）亂（？）布（？）衣（？）き（？）り（？）次（？）り（？）左方（？）次（？）り（？）花（？）並（？）と（？）掌（？）灯（？）ハ
通（？）り（？）て（？）時（？）別（？）と（？）り（？）つ（？）と（？）き（？）る（？）掌（？）灯（？）の（？）具（？）ハ（？）右方（？）の人（？）より（？）取（？）り
包（？）され（？）る（？）より（？）小（？）や（？）願（？）め（？）ん（？）ほ（？）く（？）ふ（？）と（？）傳（？）を（？）ふ（？）や（？）ひ（？）り（？）と（？）て
と（？）く（？）燈（？）臺（？）と（？）敷（？）上（？）れ（？）六（？）位（？）と（？）て（？）立（？）せ（？）り（？）き（？）る（？）後（？）せん（？）さい
み（？）なり（？）ひ（？）つ（？）と（？）供（？）と（？）の（？）く（？）り（？）と（？）の（？）う（？）ち（？）あ（？）ら（？）あ（？）ら（？）と（？）あ（？）ら（？）と（？）あ（？）ら（？）と（？）あ（？）ら（？）
う（？）へ（？）り（？）ま（？）せ（？）を（？）ゆ（？）ひ（？）て（？）せん（？）さい（？）と（？）う（？）へ（？）き（？）る（？）より（？）左（？）右（？）と（？）の（？）く
萩（？）女（？）郎（？）花（？）為（？）菊（？）な（？）り（？）成（？）り（？）き（？）り（？）あ（？）ら（？）は（？）今日（？）の（？）和（？）歌（？）の（？）題（？）

也と我左方和歌流と専ら行きに於て流のう不歌と云
うとを古方と云ふ井のうすやうに書くをより本工脚
源明玉八扇と書くを古方と云ふ流方の六位庭中に於て
和歌流れて御前に並ぶるを後満師と云ふ左宗忠右徳
俊之左右の殿上人階と云ふめく欄干に於てとめく和歌と
流しを古方と云ふ一審海せうう同古方むしを流に今二流を
古方と云ふりて流に色流と付くを古方の流く身に志して
は具を事くを古方と云ふや作に今を古方と云ふ大長和歌と云ふし
流古方流に今を古方と云ふ退出古方流御前に作し
和歌流流しを古方と云ふ中流記小入へて

續後撰和歌集^{上秋}

鳥羽院の御時きんさい合に

大苑以行宗

花流きりうを流にいふし秋の野風のう成加

續古今和歌集^{上秋} 品保二年都芳門院前裁合に

権大綱言公實下

其葛くハ萩のちけらぬ宿うハとせくや秋の風ときう海

重陽宴^並 茱萸

岷江入楚^木 九日^木の宴^木 河九日宴月令重陽日菊

有菊花天數九秋數九仍曰重陽^{見周}

續齊階記桓榮家九月九日當大災可盡費長房云
登高節採茱萸挿頭折菊花浮酒將攘此災桓榮暮
而歸家內雞犬牛馬皆死長房聞之云汝無災

平城天皇四年九月九日幸神泉苑兼命文人賦詩
賜物有差

寬平遺誠五月五日九日文人武士行事繁多不可
急不可緩

花重陽宴ハ天皇南殿ニ出御ありて内弁外弁望
文人博士と云はく各顔の字次ありて詩と作りて文
基のよみて誦みし云献ありし出矣と云ふ御帳の左右

に茱萸の袋次ありはく御前ニ菊の花次魏小うてま
よふ近代ハ宴の義多し有りて宜陽殿にて平座
とて上卿已下着座して菊の酒を多しし作りあり
うりしり

箋江次第此義絶之後於宜陽殿有平座
西宮勤物云兼平以後依御忌月無節會同天曆依
詔十月被行殘菊宴式部外任者可預文者大臣奏
仰外記藏人催坊家

私云坊家トハ内教坊也音樂のこゝに催ともや内
教坊ハ女の樂次はくともや

御帳左右付茶奠袋御前立菊瓶 天皇出御 置物御
机上置

御内弁已下如例節會仰參議召博士献題内弁献

御料韻次太子王卿属文者探題文人次第探之次

取文臺置内弁傍内弁召講師次講文御帳東是亦

箋ニ引考ルノ間裁之花鳥の說々々々てあはし

御中とのく乃日記天正十八年九月八日菊の御

かゝ長くくくあうさ白紙黄なふにゆらううらう

らゝきてう雨の御危ニ大くきくすまひりてそれく御

女中うあくはきせありふいくのはくんしゆゆもは志きた

はるうすくくはれてはきせあり

菊合

千載和歌集 上東門院菊合うせ給うるを記のとう

はつふかとそふあり

伴勢大補

先とがきんあそつうきん菊の苑うらゆふ色小きねのいん

菊のまが初

後撰和歌集 秋とまにに任くうりらる時九月八日いせの

家のまがこまうはきせふきりきりたれと又の所たれで

うん

藤原雅

藤原雅はあつちやよの菊のつらやいふよふん
う

伴鐸

敬ふる君よりいとの之はあつちやよの菊のつらやいふよふん

菊綿

紫式部日記九日菊のよふ兵衛のねをよのよてきて

ふれ殿のうのよをよふていふうたいのよひてたまふ

のよまふつあはれ

菊の露のふらに神をそ花のつらに子代いふ

残菊文臺

西宮記天曆五年十月五日上畧藏人所花瓶二基

挿菊立南庇先例以供御讀經之大花瓶挿之右大

臣又以爲難

羽林抄上畧儀式云内藏寮立文臺於舞臺西北以

皮敷地立上臺上置草
菅唯參議已上在殿上

宗直曰殿上モ亦同ニ黒塗菅トアリ是

日リ前ニ見夕リ
西宮記天曆四年十月八日置殘菊節明年己後定
爲五日
本朝文粹天曆四年九月廿六日詔曰九月者先帝
昇遐之月也故九日之節廢而經年云云詞客才子
漸吞吟詠之聲詩境文場已爲寂寥之地宜開良讌
於十月之首御翫餘芳於五美之叢凡厥儀式一准
重陽

菅家文章惜殘菊各分一字庭制序曰黃花之通重
陽世俗謂之殘菊
新雪見參
三代實錄元慶五年十一月十九日癸亥雪猶未止
勅賜六府將佐己下見在陣座及五位己上在侍從
所者綿各有差外記內記亦預之慶新雪

雪山浅川くふ

續拾遺和歌集 冬 雪いんふのつゆ小雪の山はくく

多作り雪あゝ多ふらゝと傳きふ

同坊内侍

つるふのつとまりて雲井小かふ山とぬらん

台記久安二年十二月廿日大雪洛中殿上九寸院

剋向舟園眺望次向東北院權中納言過也即歸家

築雪山

同廿一日少納言成隆迎今日歸成剋終雪山之功

東西一丈五尺南北一丈二尺七寸高一丈八尺二寸

玉海安元二年十二月八日己卯雪降積地二寸許

侍從造雪山

同文治元年十二月廿六日し亥夜雪高積殆及尺

近年之間景少之甚雪也大將方企雪山忠武持參

雖此夜下名云云

競渡

西宮記天德五年正月十九日於冷泉院競渡負態

公卿及獻物付御厨

子取

有酒饌絃歌鷄船給祿

藏釣戲

文德實錄仁壽二年二月し丑帝覽藏釣戲左右相

分飛鳥遊附者不禁

覽打耗

本朝世記寬和二年五月卅日丁酉此日天皇御南
殿覽耗番長以上各十人左右近衛左右兵衛官人
並七人爲二番皆著褐冠騎馬立南階前爰右大臣
玉打出於庭中之間皆競打之乍二番左勝此間左
方奏音樂此事甚希有也仍粗記之

開襟

續日本後紀美和二年秋七月甲辰朔天皇宴群臣
於紫震殿左右近衛逆奏音樂勅令四位已上開襟
至夕宴罷賜祿有差

觀魚

續日本後紀美和五年七月丙寅天皇幸葛野川觀
魚賜扈從五位已上祿有差

蓮葉宴

續日本紀寶龜六年八月癸酉始設蓮葉之宴

芳宜華譙

續日本後紀美和元年八月庚寅上內宴清涼殿號
芳宜華譙賜近習以下至近衛將監祿有差

鴝鵒戲

本朝世記久安三年十一月十八日戊寅今日殿上
淵醉也事了雲客參皇后宮御方有醉舞事左大將
雅定新大納言伊通卿侍從中納言成通卿左衛門
督公教卿權中納言公能卿新中納言季成卿祗候

宮御方各成鴝鵒之戲盃酌無筭也次有御前試事

如常

系引

延喜內裏儀式踏歌節註延曆以使後踏歌訖縫殿寮
賜榛摺一坏本綿一連即夕令近臣絲引至于大同年
中此節停發弘仁年中更中興但系引榛摺群臣踏
歌並停之

詩合

西宮記天德三年八月十六日己丑有詩合左右各
十首中畧左方進獻詩之間右先經仙華門參入獻
詩十首書縹色紙入淺香筥置口繼立敷竹豹皮取
雜色昇文臺筥置其上左方經瀧口小戶參入獻十
首書縹唐紙各下繪隨題納蘓芳地螺鈿筥置繼縫
白書其物色立花是
等組敷唐錦一条殿上六位昇文臺筥置其上左右道
風書之

掩韻シテキ

西宮記延喜二年七月十七日後院調酒看賭物依
御忌御簾中簾外裝束如常有掩韻事御忌

猪隈關白記建久元年八月十一日戊子去夜大雨
今日又同但晚景一大霽今朝大風入夜有掩韻事
權記寬弘二年四月四日辛巳詣左府有弓負態入
夜韻掩

歌合金殿於

西宮記天德四年三月卅日自今月上旬被書分方
人以更衣為方頭典侍掌侍命婦藏人為方人十九
日分侍臣為方人頭伊尹朝臣當日早且雜色以下
參上供御裝束其儀西庇皆懸御簾之間渡殿中畧

申二剋御出召左右歌右方令持洲濱二札一歌一籌參

上自御湯殿西邊獻童女一人著柳執地敷淺縹浮文織物

立御前欄下一人敷地之後四人舁之立沉札入金

筋淺香下札入金銀筋覆花文綾青末濃加柳折枝

繡文札四角以金銀作柀枝四便為覆臺也有是

結組無帶洲濱中畫七寶以色紙書小字詠花樹歌

各結著其枝題好鳥計令含將其皆主如春霞暮首

夏變望之類詞或在人手或載漁舟惣二十首隨便

宜分置小舍人實正執銀花枝下居砌傍藤實明三並與光惣

三人著青色指籌小舍人二人舁負洲濱置實正前次左方

自殿上侍方參上童女一人執地敷紫敷御前事如

右童女四人舁洲濱立地敷上洲濱躰同右紫檀札蘓芳下札同色村濃

處々有蕁洋並藤折枝繡文有帶無總其中銀鶴食

黃花一枝以金作八重葩以青銀作敷竹葉每洲各

首一童女執指籌洲濱參入野水無机有花足洲棧

小舍人二人藤原宣賴紀延方於砌下取傳置負指

前殿上公卿依召參上左大臣大納言源朝臣右大臣

等南左右方頭弁備衝重給公卿並男女方人殿上六位

取傳召左方延光朝臣右方博雅朝臣令講歌評定問

勸盃酌左勝御厨子所供御菓子干物童信陪膳供御酒左

大臣獻之召樂所人々砌下奏樂兼書分左大臣等

大左右殿さきと申す秋の公よみ人と弦小書て合せしき
 是といふ一への卒のふりたよせんとこのと系の儀、海一
 正多うんめつりしとやとて秋に成つて祿りり題ハ露野
 花月小形ん傳りりるけ此を郵、さうとせあふ死と大殿の
 秋合の題よ傳とこととて鶴よとつて祿りり相換侍留大
 輔九坊つ常ぬえ後とるる若房九人十人侍をよとの
 らく若狭うく人成つてくこ為てしせりり後殿の東西の
 母屋ひさし成と進部の座とん源大納言師房小野
 宮中納言實平左衛門督隆國三位侍従泰平新中納言俊家
 中宮権大夫経長右大弁経長をよとて殿上人ハく

廬馬の馬此はく先しきふりきとハ其の所より古頭
 中将つさくくのハ九人より引つまうと糸りり此兼乃
 中六小面こ分てわらと左とてとらうの古藤守子の
 衣とるんき傳りり左子のまきとこに公とててうまの
 じまひ袋小いあく此と成むとふつとぬとてくやふ
 して古今弦七帳あうとくしき秋弦のこのさうし一帳
 入る重表紙ハさ極くふかさり多り打し記すてしこの
 ぬせんまうに卯花成ぬとらりり数うの金のまき
 極ようしてのと成つたりて葉山よ書たぬくさくさり
 数ハ書成さうのしとへも也打し記すとりの浮線

後より右よりみ海にうのひらけりけり子の透箱
うけにおきて弦のうらうら六枚あつては弦乃菓子
一枚紙入表紙の繪をぬく二藍のうらうら白と文と
ぬいふか敷うの金のまをぬい金のつるらまうたてら子
をつまむとふをうらうら敷ははるの浦はひまき
打し紙はまのうらうらに縫お紙あつて日ぬい言ぬ
まはひぬうらうら小居分うら大長殿いつては弦をうら
と蒲毛のうらうらとてまのひぬぬ左に位少将右兵衛
佐うらうの双紙とまてうら合はるはうらうら左のうらうら
頭弁人うら八人うらまてまうらうらうらうらうらうら

成て二巻と達部の中よらう免創し紙とまきうら殿
と人の中より箱有はいみあふまゆりうらうらまに
けはともたは紙けそはみうらう免うらう紙のうらまは
とて箱有うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
卯花の秀秋うらうらうらうらうらうらうらうらうら
みうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
かうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
岷江入楚繪合女房此うらうらうらうらうらうらうら
みうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
花 天徳四年三月廿日内裏秋

合と摸して、此子也。清凉殿西の庇にて、
人所立御侍子南第四間為左方女房座北二間為
右方座後殿南北敷縁端帳為公卿座後凉殿簀子
為侍臣座西宮云々

河 三月十日天德四年内裏歌合西宮記云其儀西
庇皆掛新御簾納仁壽殿也第五間渡殿間立御侍
子臺盤所南方御儿帳立置物御机在御南第四間
垂御簾為左方女房座矣北二間為右方座御座渡
殿南北各敷縁端三枚為公卿座後凉殿東簀子敷
從渡殿南北相分鋪長帖為侍臣座南小庭各敷帖

三枚為樂所召人座今按清凉殿西面也御記云暫
撤清凉殿南殿中渡北部云

今様合

玉海兼安四年九月一日し西院中有今様合公卿

云 余人 今日番所大納言實定別當成親云
同十五日上畧又改北政所御忌日也入夜參上今

日院合給了日也又有御遊云

百練抄兼安四年九月一日於大上法皇御所法

殿寺有今様合事撰定堪能輩十間每夜一番夜

被爰雌雄師長資賢卿等為判者十三日仙洞今樣
合之爰有御遊平上皇令歌今樣給希代之義談也

長秋記天永元年五月廿三日戊午晴少納言來誂

三有枕合紙枕云云

種合

長秋記保延元年三月二日晴女院有種合事左方
模五節所體云云

同三日丙子女院有鬪雞事左方限合之摸臨時右
頭經宗依病不參之故也

大井川三船

源時中橫笛譜裏書寬和二年十月十三日大上

天皇於大井川邊遊覽攝政扈從事獨要記之當日

未剋御幸其式不攝政已下御共公卿殿上人參勒

紙在別澤僧正寬朝於當座則被召具之皆被擇撰詩

歌管絃等被乘三艘船之由各競道挑藝凡彼此之

所能驚水上之耳目殆嘲前例誠後輩其中公任相

方兩朝臣被擇入于精撰相兼三之船施面目於船
中而留其名於累代云云

著聞集和歌 圓融院大井川道遙の時三舟小のふ

者わらわり帥民部以徑信以又人のふたくくささり

白河院ふ河よ行幸の時待秋管絃の三舟とううく

そ后の人くとワらくくのせうまうる小徑信以逢糸の回

この外よはまききりりきふよりりまままききりり

きふる三幸く紗くる人よくみきりよひさはつさくや、

いつまの舟よてさくせたていいれるをきふ時とり

ていみりりきふくいんまり小逢糸をれるを

さて管絃の舟よ糸で待秋賦とれるり云舟こ

糸くいれるを

襪合

飾鈔襪上畧佛名故人有襪合之事或練緯十二重

或雪下紅委畫種々美也近代如此事一向絶了

小弓

長秋記長兼二年四月小七日壬辰晴師仲依召参

内裏小弓會中宮入夜歸中畧不及廣只格勒鞞十

余人應召各射五度射取掛物白紙十枚又射取
人々少々相交云云民小中云云記
増鏡老のある時ハ御小弓ハ云云御まけ
こハ新の云云ぬらふか云云の女官云云みせ給へ云云新
の云云ハ童乃云云け云云つ云云て云云女云云
水干云云せて出云云る云云事云云も云云侍云云り云云

小弓合

百練抄寛治三年三月廿六日殿上小弓合

小鳥合

百練抄寛治五年九月六日内裏小鳥合

角合

山槐記治養二年六月十九日今日於院有火打角
合云云一方公卿殿上人僧並四十余人一方北面
下臈等也公卿方鉅海浮銀船都合銀二其内網角
北面下臈厨子一脚上置銀手筥二合網之此定近
日天下經營諸人愁歎或下知庄園切生牛角數十
適雖持來稱下品弃之罪業之因縁之由或人來談

也

同三年六月十七日今日於院有火打角合云云一

方公卿殿上人僧四十餘人一方北面下廊等也公

卿方鉅海浮銀船都合銀二其內納角北面下廊厨

子一脚上置銀手筥二合納之此定近日天下經營

諸人愁歎或下知庄司切生牛角數十適雖持來於

下品弄之罪業之因緣之由或人來訖也

百練抄治養二年六月十九日角合事天下營唯在

此事

圍碁唐綾四勝有別祿

續日本後紀養和三年三月庚戌是中旬之初也天

皇御紫宸殿賜侍臣酒至御床之下促侍臣座令以

圍碁且彈琵琶日斜酒罷賜大臣御衣下畧

西宮記延喜四年九月廿四日召寬蓮右少弁清貫

等令圍碁唐綾四勝有別祿

同十六年六月四日御南殿北廂西第三間令侍臣

依仰圍碁負者賜酒

勅日本脫靴

續日本後紀美和二年六月戊午天皇御紫宸殿賜
侍臣酒且令圍碁天皇依炎熱脫御靴勅侍臣同亦
脫之因是碁手紙集擲雜戲
御庚申小弓御遊碁手紙集擲雜戲
左經記寬仁二年二月十三日庚申依有御庚申事
夜部有召參入及晚內藏寮飯酒著殿上次召侍從
參御前先別前後小弓次御遊次內藏寮進碁手紙
御料侍集擲及曉更有和歌遲明
從料也

長秋記大治四年五月廿日新院御方有覆物御卜
覆以將碁馬數十二新院如指合古給依前生戒
部受人主法給依是諸事如此歟

碁囊鈔碁ノ馬ニ玉ヲ玉ト云ハ何ノ故ソ兩
王イマ事ヲ忌テ必ス一方ヲ玉ト書リ是手
跡ノ家ノ口傳云々經ニハ世無二佛國無

二主說 憲法

二八國無二君民無兩主ト云リ

大將基

台記康治元年九月辛丑新院參於御前與師仲朝

臣指大將基余負

目增勝負二四一半錢

東鏡安貞三年五月廿三日 上畧 信濃民部大夫入

道等被參御所將軍家召出扇令置于彼人々中給

各以日增勝負賜之當座興也

同寬元二年十月十三日庚辰為備後守奉行博奕

等事被經沙汰雙六者於侍者可被許之至下臈者

永可令停止四一半錢目勝以下種々品態不論上

下一向可被禁制之由被仰出

云

外下音

筒塞

山槐記元曆元年大内遷幸著宜陽殿 中畧 起座參

殿上 中畧 攝政被參御前但無出御頭弁召諸卿著

御前孫庇座新宰相中將以上也頭中將通資朝臣

勸盃藏人右衛門權佐定長取瓶子ナ扞衛重技攝政

前藏人右衛門權佐定長侍從信清役之也次前紀
伊守範光右兵衛權佐長經皇后宮權大進家實等
役之懈怠殊息殆為一時居之猶統及右衛門督前
居之次親經鋪擲圓座次立切燈臺次鋪庇圓座攝
政立自座前入大床子著奧皇后宮大夫以下二間
以南分著之新宰相中將雖無圓座列之職事計人
數可令鋪歟中將又召藏人今敷之後可著歟御新
紙持參親誰持參筒塞六位一臈判官範清五位藏
人右衛門權佐定長四位頭中將通資朝臣次第置
紙公以又自下臈置之扶塞次第又如此右衛門督

新宰相中將拔指芻皮家督之自余取紙之拔芻擲
了賜祿自下起座

庚申筒塞

西宮記御庚申出御

御座前置半疊一枚其邊立小燈臺又以大塞並筒置半疊而

依王卿依召參候

孫庇

置御料錢供御菓子有仰有

集攤

打高塞者候御前宸後打高自者或者作文聚錢打被時又始打之

歌遊和

歌事無定

百一

吉田定康記延元元年二月十一日庚戌晴百一
ヶ振舞云云

同十二日畠中丹後百一ヶ振舞

擲攤

三長記建久九年二月廿日戊子晴今日從閑院殿

遷幸又内裏中畧次賜公卿碁手錢常下御前予次

持参筒塞藏人芋清次從下獻紙各取一次擲攤先

位次予
下畧

栄花物語

月の世よりゆりてのち中畧はまきく小松

はし免さふこ日かゝハ松まへこめいすく海く

せへん残つうせいこふとり残せさせく流流し下畧

拾遺和歌集賀雜東宮のいこふとり此いこ免こ

此一残包えてひとこひとこまう残く免まうせらる

うこ人まうん

若じまひらひもうんきれ石の敷とみまらよりひいそ

長秋記保延元年四月六日己酉女院いこふとりと

若うせく御流し中畧

山家集いーまとの秋

いーかみいれ落るるはるかにする月星をうりやいれ

らんこ 貝おほひ まる 庵んぼん

續世継第七 村上源氏つれ川うち源氏をそそり

いせいしきれあひつまあり外々き定りあひらん所

の方いそれいーぬれ多らんこいゆあおと外々き

いーら

拾遺和秋集秋 天禄四年五月廿一日 園融院の

いーく一品宮に渡らせまひてらんことし留給るふり

まけしき成七月七日いーあやうり内の大らん所

をうきる扇ふりしきく信らるるんまのよとま甘く

信まか 中督

天川河原源いー七夕小扇のう留と折やうりま

増鏡内野 兄かくゆりてたきふかかーぬせハこま

き御せひまこり外のいそまかー撰政殿さへ書いあ

い後ハふあひるさうひくぬひく甘房のち小ゆり

はらんこ貝おほひてまを庵んつまおくやりの事

成おまひくこいー日残るるー給ハ

貝おほひ

徒然草 下 貝残れぬふ人の我前ある残ハたこてみよ
して人の神のけひさ乃下迄多残るを御由し前ある
人におほひぬふおほふ人ハ我まうくもまふくも
是れしてちたはる残れぬふをうあましくおほくたぬふ
あり

玉海養和二年正月十八日午朝参御堂 中畧 次有
佛經供養事 中畧 今日依為吉曜遂之經者蛤貝書
之聖靈平日殊令始貝覆之數給仍翻彼罪取寫真
實之妙文也且先例多存故也 下畧

後奈良院震記天文四年十月廿五日天晴早且雪
深座主宮青蓮院舅殊院各自處々卷教被進青蓮
院舅殊院被參覆貝朕克也旬御方樽羨物色々進
上 此等所被進御書外別世外御書
身持院御書並承六月六日壬土自 二条殊院御書
同建並ふせく物語 此等所被進御書外別世外御書
拾遺和歌集 下 雑 なせくおほく 小

公家といえといふ所の踏し松干年残ゆも誰うとふ屋さ

徒然草 上 大覺寺教少く進習の人ととをそくを化して

とて従事する事へんこと忠守ありて事なるに侍従大納言
公明に我物の事あると見えぬ忠守ふかき事なくにも
にうらみ唐執子とててりひありてけり腹たらく
退出にけり

同鉄槌をそく謎ノ字ナリ玉篇謎末閉反隱言也

長秋記保延元年六月六日主上自 二条殿院御

所也 中畧 於院有和歌是云松風如秋並初戀有義

被停 中畧 應召公卿四人按察使別當大藏卿右宰

中將公教其外殿上若 テ 不讀應製臣上宗事了有

連歌並ふなくものびり等 云云 五日天部平且書

宣胤記文明十三年二月二日丁未晴参内之

又以取長被仰下云ふそく當座各令新作可申入

云云 乍迷惑加思案則申入處有叡感又有製作被

尋下各解申申余殊有御感小折三合被下之可謂

面目祝著之注左

一殿上の下侍のうハニ 浅くすま見矣ハニ 當時番衆所下

侍也余 石上於御前各解兼ぬ親王御方御と

新作 ありと云 云 下侍と云

重侍りことりれそりく思石とことり有叡感

一のかうの言 西川希宰相進之 但右坊門書作之

一少の本 已下畧之

比々奈遊

台記久壽六年正月廿三日辛丑上畧及晚旦渡御

女御戸御冠直衣有比々奈遊事遣召左兵衛佐實

定所持之作物戌剋還御御胎後渡御下畧

名月記建久十年五月廿三日中將殿見參之後退

出又參上於御前將基大臣殿御供參角殿深更退

出出

宣宣

九曆天德二年七月七日有中宮小車遊事

系引

内裏式注 踏歌延曆以訖縫殿寮賜捺摺衣群臣狩衣

踏歌訖其院庭中賜酒一盃綿十屯即夕令近臣絲

引至大同年中此節停廢弘仁年中更興但熊引捺

摺群臣踏歌並停之

布引

西宮

西宮記延喜七年八月九日臨時召五番相撲了中
畧有布曳事料布積平札履方人飲罰酒

同十五年於仁壽殿前召相撲十二人左十人仰内

藏寮給素餅酒者官人勸盃有布曳事各給足絹宗成加

給調布其時與中殿所

天曆四年八月十日於綾綺殿有相撲事云云布引

七番机盛布

權記長保二年八月十二日故按察使記云云左大

臣仰左中將經房朝臣令相撲人等奉仕布曳事左

叡手大鹿文時就案東頭院取布一段進庭中右叡

手越智常世又如之到庭中牙各以取持布投遣繩

合引之文時得之次左助手御春時正得右助手秦

經政次左九部元光得右紀豐延次左物部惟延右

真上勝思得次左宇治部利村得右凡時正次有仰

給祿下畧

本朝奉命出外數十對香筆跡林冬所言

宣獻時志ひ書かき月八日辛亥天部顯言陳日林

御ゆとのくうへの日記慶長三年二月四日字奴も御

校念こおのく志こう志ひ書う紀有うてくあ戸の南の

御庭よくまふふの志こう此あくくくらふとみせらう

かんとておとこころち多ん佛るありんせへく色くら

十種香

宣胤記文亀二年二月八日辛亥天晴顯言朝臣持

太刀來於桃花坊十種香宰相持參酒者

元長記永正三年正月十四日細雨下餘醉散々終

日平卧及晚參内仍當番也十種香賭一種持參一

種并領之

同明應十年四月十日晴依召參内十種香記六予

可書由有仰仍書之御人數式部卿宮中畧賢湯朝

臣等也賭物被出

中畧

一畧文
沉十帖

宗山御并領其後有

一獻

同文龜二年正月廿二日

上畧

於御前有十種香下

記六

親長記文明十年正月廿日雨下今夜有十種香新

中納言

銀鶴入薰物

玉海治美四年七月八日戊午天晴此日良通大將

寶花山院中納言兼雅卿女始出行戌剋來余弟其

儀半部車 中畧 五位八人差車於寢殿南面大將著
布衣自中門來會奇之項之歸 本 不出 銀鶴入薰物爲引
車中 今夜大將女房渡東面也

薰物納風流筥

五葉兼元三年三月廿三日此日攝政殿前大政大

臣長女有入宮事

所々御訪 平五日廿二日

一院御使右中將通方朝臣

銀龜形 納 薰物居銀筥蓋鋪紅薄様一重 十二陰

唐件 筥蓋形透齋院御使 日 頼房朝臣

銀龜形蓬萊山形納薰物洲濱形上 上立 松鶴

白銀籠ニ虫ヲ入奉

新勅撰和集 賀 園融院御時中將公任と基つ

まつりてまけり 小志ろりの籠へ虫いさく弘く

小野宮右大臣

百代の秋をゆらつる はるはる 岩は し 秋 は 松 の 宿

伊勢杵諸源氏杵銘の意風流並念珠付五

葉枝黒方成ちりる梅之付

増鏡川飛鳥

捧物袈裟付銀枝

台記天養二年九月二日し巳宇治一条殿御逆修

結願云云獻捧物袈裟付銀枝其數十一也

御本附打枝並御贈物

玉葉美元五年正月四日朝覲行幸

同五日上畧左府被問中宮大夫云昨日行幸御引

物如何隆季答云御本一卷入管裏錦御笛御書

毛詩一部九卷入沃懸院螺鈿半蓋等二右大將一

奈大納言新大納言等取之云云

同三月九日上畧此日入道相國室二品光明心院供養中畧

御贈物院御方金獨鈷裏錦付銀枝前大相國取之

御取簾交陽西院司此日水精念誦掛銀搔右大將

親信朝臣受取之銀橫被付金掛銀蓮花右衛門督取

前簾前院司泰銀橫被付金掛銀蓮花右衛門督取

範朝臣請取之御方手本裏錦付銀枝左大臣取之

受取之女院御方手本裏錦付銀枝左大臣取之

笋一張和琴入錦袋中宮大夫取之中宮御手

本其如女院 中畧 白川殿御手本同前 下畧

玉海文治三年十月廿三日 余参八条院依小兒

真菜事也 中畧 女房取贈物出来 手本裏錦付銀打

召伊輔令取之余退出後聞隨身給腰絹 枝以玉結垂之

同美安五年正月五日左府被問中宮大夫昨日行

幸御引出物如何隆季卿答云御本一卷 入管裏錦

御笛御書 毛詩一部廿卷入沃掛地螺鈿半蓋 等也

箱付組緒寛治三年被進毛詩例

下畧 御手本附梅作枝

増鏡 北野 正元龜山殿の御まゝの櫛ほら移し

常らふもいとまれハ行幸あらへくおほいおま

中畧御 後人ノ、秋とてまらる花笑返年とと題る

よ中畧之らせ給る法おくり物ともいさうめくまら

延喜の御手本残鶯のわら梅の作り枝よ付て

せ給ふとて院のうへ 後嵯峨

東梅枝小代のひのまゆけく

出御御手本一卷令喰鶴口

玉海文治三年正月己未天晴此日小童 九 始渡山

階寺別當僧正許内府相具中畧秉燭歸來小童引
出物銀洲濱立同鶴許鶴口午本一卷令喰件午本
裏薄様也又内府被引馬云從僧二云厩司兼親交

取前駢云云

大鏡

右大臣師輔公

正月朔日付け予後給厚さ急たいの世

こゝろれたりきさハばくろくせ給はく中畧ゆゑにき

せ給てわうくの事のもまハ内におそくまいつらうけ

させ給きハおゆき大殿おとろせ給てより比まうせ給つり

らふとりいてさせ給てやそあつものこまうせ給てい

くうふりうねのえこにはまうせ給つりまはり

のうろへハ清心のおよふおりまかりまうらめ

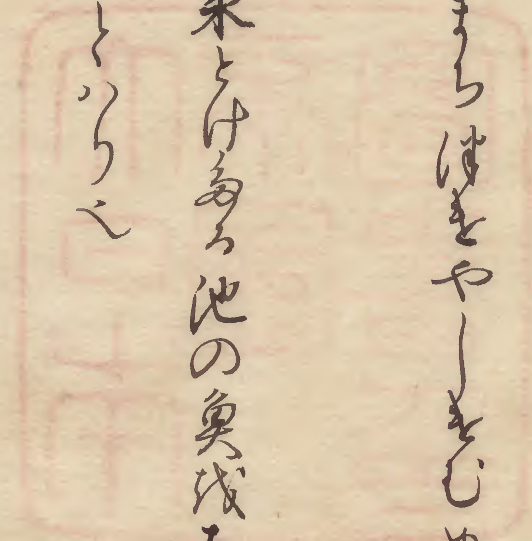
を成ばうゆさふまじとかほりてまうなりれ

やうたる残まらばきやまじめいほくいかハかるる

きふ

ぬく風よ米とけあふ池の奥成らよまて書のうけふくもん

集入うろくりり



附寄明憲館上詳... 出物報明... 取...



